

カトリック山形教会報 かすみ

カトリック山形教会報

12

2012.12.24



カトリック山形教会

〒990-0039 山形市香澄町2丁目11-15 TEL.023-622-3574 FAX.622-3590
ホームページ <http://www.catholic-yamagata.com/>



とても85歳とは思えないほどバワフル。講演中は用意された椅子に最後まで座ることはなかった。

シスター渡辺和子さんを迎え黙想会開催(12月2日)

不可能ではない アルタバルのような生き方

12月2日(日)、シスター渡辺和子さんによる待降節の黙想会が聖堂で開かれた。多くの聴衆が聞き入りご降誕の前の良い準備が期待される。会に先立って沼沢会長の挨拶と講師紹介があった。

ただ今ご紹介いただいた渡辺です。教会では四本のローソクが立っていて、昨日はいわば大晦日、12月2日から新しい年が始まりました。住んでいる町ではクリスマスの準備で忙しく、25日が過ぎるともう正月を迎える準備になりますが、私達のご公現まで馬小屋の飾りつけを残して、イエス・キリストのご誕生をお祝いします。このシーンでの中心はイエス・キリスト、ヨセフ、マリア様ですが、羊飼いや、そして三人の博士も登場いたします。

東方で星を見て、救い主が生まれたことを知って、三人の博士は、それぞれ贈り物を持って駆けつけます。一人は

黄金、一人は乳香、もう一人は没薬を携えて来ました。イエス様が心の王様として黄金、また、人間の姿で現れたが二位の神であられるので、神々しく香をたくために乳香を、そして没薬はイエス様がやがてご生涯の最期、血を流して亡くられることの象徴として贈られました。

私達一人一人がクリスマスを迎えるのにふさわしく、また、クリスマスが12月25日で終わらぬよう、一年中、さらに私達が死ぬまで毎日がクリスマスとして過ごせたら嬉しいと思います。

博士達は実は四人いました。伝説の中で四人目の博士の名はアルタバルと言ひ、医者で豊かな暮らしをし、占星術にも長けていたとされています。メシア・キリストが生まれたと知ると、彼は医者や辞めすべてを売り払い、真珠を持ち、イエスを捜す旅に出ます。旅の途中で病人に会えば手当をし、また、豊かな知識を持っていたらから、どうした

(2面につづく)

ら荒地を耕し種を蒔き、収穫できるかなど、惜しみなく教えましたでしょう。他の三人に遅れて彼がイエス様の生誕の地に着いたのは、聖家族がすでにエジプトに逃れた後でした。

それからアルタバルはイエス様を捜し続け、すでに30年が過ぎてしまいます。その間も沢山の人を助け、農耕も教え、いつも捜していたが会えずにいたある日、とうとう十字架につけられるイエス様の話を聞きました。彼は最後まで持っていた真珠を持ってゴルゴダに急ぎます。途中、身を売って貧しい家族を助けなければならない哀れな少女に会い、彼は真珠を差し出してしまいます。

その時、大きな地震が起きて崩れ落ちてきた建物の下敷きになり、死にかけてしまうその時、息を引き取るその時に、イエス・キリストが現れ、優しく彼に「アルタバルよ…」と声をかけるのです。彼は言います「イエスよ、すみません。もう、何も差し上げるものはないのです。30年あなたを捜し続けたけど、会うこともできませんでした…」すると、イエス様は本当に優しい眼差しをし、「アルタバルよ、お前の真珠はここにもらっている。お前と私はもう何十回も会っている。」と言われるのです。彼はイエス様の胸に抱かれ、息を引き取ります。

待降節、イエス様の誕生を祝いに行こう、幼子に会いたいと思っている私達は、三つの宝物を持ってはいないけれど、アルタバルのような生き方は不可能ではありません。マタイ25章に書かれている、「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた。」「わたしの最も小さい者にしてくれたことは、私にしてくれたこと」を思い起こします。

アルタバルが貧しい人・病人・のどの渴いた人・牢につなげられた人に何か善いことをした時、それはイエス様をご自分にくれたことなのだと行ってくださったのです。

笑顔を忘れた人に笑顔を、おにぎり一つを空腹の人に、少しのお金でも事欠く人に与えてくれたことはアルタバルの数々の善行を「わたしにくれた」と言われるように、イエス様にしたことなのだと行ってくださいます。私達にできる小さなこと、たとえば修道家族に「ただいま」と声をかけたり、なんでもない優しい言葉をかける、荷物を持ってあげる、ドアを開けてやる、等いろいろとあるでしょう。

自分を振り返ったとき、もう少し優しい言葉をかけたらよかった、落ち込んでいる学生に「元気?気をつけてお帰りなさい。」と言えよよかった、イエスの最も小さな兄弟姉妹にかけた言葉や小さな親切を意識したいと思います。

長い管理職(シスターは36歳で岡山県のノートルダム清心女子大学の学長に就任)にあると、煩わしいことが多々起こり、心がふさぐような時、私は学生の挨拶で救われてきました。挨拶は、時として落ち込んでいる人に立ち上がる勇気を与えてくれることを、私は身をもって感じています。

イエスは、ご自分を悪く言う人、弱っている人、助けを必

要とする人にしてくれたのを、ご自分にくれたと言われます。そして、それは「私にくれたことと受け止めているよ」と言われるのです。

私達は、できるだけ笑顔でそばに行って荷物を持ち、その人の傍らにたたずみましょう。「優しい」という字は、憂いを持っている人の傍らから逃げないという字です。自分が自分にとって憂いのかたまりになった時、自分を見捨てないことです。

暗い顔をしていると、周りの人も暗い顔になってしまいます。不機嫌は立派な環境破壊ですし、顔や態度で発するダイオキシンです。人様の暮らしまで暗くする権利はだれにもありません。

挨拶が多い、笑顔が多い人は、それだけで周りを温かくします。だから私も修道院に帰ると、できるだけ明るくしようといたします。そういう意味で四人目の博士アルタバルの生き方は、いつもイエス・キリストとどこかで出会っているものだったのです。

また、この生き方を徹底的に生きた方がマザー・テレサでした。マザーは人が嫌がる道端の人、エイズの人、病人を連れて帰り、体を拭き、髪をとかし、人間らしい生活をさせて、人間らしく死なせてあげました。宗教に関係なくその人々の望むように仕えたことは、とても大切なことです。

私は35歳で岡山に派遣されました。神戸より西に行ったことのない私にとって思いがけないことでした。長上の命令どおり学生達に教え、一年終えた時に学長が亡くなりました。米国の本部の命令で36歳で学長になったのです。それまでの学長は二人とも米国人のシスターで、70代後半の方々でしたから、すべてにおいて難しい、風当たりの強い立場に置かれました。私は修道院を出ようと思い、以前上智大学で7年間働いていた時の上司である米国人の神父様に、東京で会議があったとき相談しました。

同意して下さるかと思ったが、神父様は「あなたが変わらなければどこにいても、何をしても同じだよ。」と言われたのです。

考えてみれば、それまでの私の生活はクレナイ族でした。分かってくれない、褒めてくれない、お詫びしてくれない、…など。「あなたが変わらなければ…」と言われたのは、このことか、と目からウロコが落ちた思いでした。

私は変わる決心をしました。積極的に褒め、ご免なさいと自分から謝りました。初めは損ばかりしているように思いました。やがて、学校が変わったのです。

また、私は人の命は両手でいただくと思いました。大切なものをいただく時、(たとえば賞状やプレゼント)人は両手でいただきます。私は、こんなものやりませんと思うものをも、両手でいただくと思いました。50歳でうつ、63歳で膠原病(こうげんびょう)になり、神様にお返ししたかったが、「幸せは、いつも自分の心で決める」としていただきますので、いただきますなかったけど、両手でいただきました。

あの体験があったからこそ、少しはマシになったな、神は、私が天狗にならぬようにあの贈り物を下さったのだと思

うようになりました。

あのイエス様でさえ人々から誤解され、誹謗中傷されたのだもの、私も十字架につかないわけではないと思うと、自分を少し納められたし、立った腹も納めることができました。私はそれらを小さな死 — little death — と言っています。大きな死のリハーサルとして、両手でいただく練習をします。

わがままや辛いときの不機嫌を人様に及ぼすことを潔しとしないことです。自分がされてうれしいことを人にする、これをゴールデンルールと言い、また、自分がされて嫌だったことを人にしない、これをシルバールールと言います。自分にとって面倒で、悔しく、理不尽であっても、マリア様のように心に納めている生き方です。これは、本当のプライドある生き方です。

自分のプライドは、自分が作るものであり、また、自分の心が幸せをいつも作ると思います。自分と戦うことは自分の死を体験して初めて乗り越えられるのです。「一粒の麦が死ななければ…」の通り、一粒の麦の種の死のお陰で豊かな実りを見ることができるのです。イエス様は「あなた達も小さな死を味わえ。」と言われます。それは、ある意味で、置かれた環境の主人として生きることになります。「置かれたところで咲きなさい」これは、ある神父様が書いてくださった詩の冒頭の言葉です。置かれたところで、できるだけ明るく自分を必要としている人に与えなさい。そうすれば、あなたをそこに神が置かれたことは、間違いでなかった、そうなされた神への賛美につながります。

神は私たちの力に余る試練は与えません。それでも私たちが不平不満に陥るとき、神は試練に耐える力、逃れる道を必ず与えてくださいます。神も仏も無いと思うほどの体験をしてから、「いや、私ができるから与えてくださったのだ」と思ったり、助けとなる言葉や人を添えて下さるので

す。

あなたに微笑むことのできない人ほど、あなたの微笑みが必要な人です。私に二人の兄がいました。兄達は、「お前のようにすぐふくれる人はお嫁に行けないよ」とよく言いました。誰かが何々してくれたら、幸せになるのではなく、私のほうから微笑むのです。私は何々したけど、お礼も微笑みも返してもらえなかったときは、腹が立ち、損したと感じます。しかし、この世で味わう無駄も成功も失敗も、そして、人からの冷たいあしらいも、神様のポケットに入れることにします。あの時、誰々が返してくれなかったもので、神様のポケットがちょっと膨らんだらいいと思うのです。

年をとり、私のような立場にいる者は、3.11の被災者のために何かボランティアをと思っても、なかなかできません。でも、私がした挨拶で返してもらえなかったものを、被災者の、寂しい思いをしている人に、神様、返してくださいねと言うことはできます。

アルタバルが行く先々、その人が必要としているからしたことを、イエス様にしたと言われるように2000年たった今日も、イエス様へのプレゼントにしたら良いと思います。真珠=捧げ物にします。心を平らかにするために、「どうして誰々は何々してくれないんだろう」と思うより、工夫の一つとして神様のポケットの中に入れることにするのです。クリスマスまで私はアルタバルのような捧げ物をしていきたいのです。そして、一人一人がふさわしく待降節を迎えましょう。ちょっとでもいいから、小さな小さなプレゼントを、お生まれになるイエス様に捧げられたらどんなによいことでしょう。

私たちには「許す」と一言言えば済んだのに、イエス・キリストをわざわざ子として世に送って下さり、私たちと一緒に泣いたり喜んだりして下さる方…私たちは小さな死を味わうことで、この待降節を過ごしたいですね。

(記録/広報部 フランチェスカ・菊池あき)

私のクリスマスの思い出

アシジのフランシスコ 三井 春樹



私のクリスマスの思い出は、それは何といっても聖劇です。幼稚園時代はクリスマス会で、小学校時代は教会学校の仲間とクリスマスミサの前に聖劇をしました。

幼稚園のクリスマス会では年長の時にヨゼフ様の役を演じました。マリア様役の女の子と手をつないで歩いて、歌に合わせてお辞儀をして、宿屋の主人に御礼を言うのが私の役目でした。聖劇の中の歌は今でも口ずさむ事が出来ます。これは卒園アルバムにも載りました。

一方教会学校での聖劇ですが、植田伸子さんやお母さ

ん方のお世話で、教会学校に通っていた仲間達と練習をしました。そして本番当日はクリスマス前夜ミサが行われる前に聖劇を披露し、大成功させる事が出来ました。当時私は小学3年生か4年生でした。ここでもヨゼフ様の役でした。この時はセリフがあったのですが練習時、そして本番前にも緊張が続きました。自分のセリフを上手く言えるか、自分に与えられた役割をしっかりと成し遂げられるか心配していたのですが、何とかやり通す事が出来てホッとした事を今でも覚えています。聖劇とミサが終わった後皆でホットココアを飲んだのも良い思い出です。

最後になりますが、皆様今年も良きクリスマスと良き新年をお迎えください。

2012年11月25日 王であるキリストの日の説教



※12月2日(日)のミサの写真を使用しています。

『あなたにとってわたしは』

カトリック山形教会主任司祭 本間研二

う思っているの？それが聞きたかったのです。でも、言ってはくれませんでした。この人は、私を好きじゃないのだ、ということが、何となく、その言葉でわかりました。

人と人との関わりで大事な事が一つ、それは、私があるあなたをどう思っているかということ、伝えることですね。「誰かがあなたをこう思っている」ではなく、「私はこう思っている」、それは人間関係の中でとても大事なことです。それからもう一つ、「あなたは私についてどう思っているの？」それを私たちは、はっきり聞かなければいけないですね。借り物の言葉ではなく、本当のその人の言葉で「私をどう思っているの？」それができる関係こそが、本当の成熟した関係ではないかと思えます。ピラトはそれができなかったのです。ピラトはそれをできない人でした。自分の思いではないのです。イエスについてみんなはどう思っているか。その事にしか関心がなかったのです。「自分はこう思っている」ということをピラトは最後で言いませんでした。

ペトロという人がいましたね。イエス様はペトロに対して、質問をしたのです。「ペトロ、お前は私をどう思っているか。」そう、ペトロに聞きました。ペトロは自分の言葉で答えました。「主よ、あなたはメシア。生ける神の子です。」その言葉は誰の言葉でもありません。ペトロの言葉です。ペトロが本当に思ったことを発した言葉です。実は、同じ質問を、イエスはピラトにしていたのです。「お前は私についてどう思っているのか。」ピラトは言いませんでした。「この人はああ言った」「あの人はこう言った」それではイエスとの関係を築けるはずもありません。

今日は王であるキリストの祭日です。私たち一人一人に同じ問いが投げかけられています。私たちに、ではありません。あなたに対してイエスは言っています。「私は一体、あなたにとって何者なのか？」目に見える姿は無残です。王であるキリストを祝っていますが、王の姿はありません。惨めです。悲しい姿です。そんな姿しか私たちの目には見えないのです。ペトロにも同じ姿が見えたのです。十字架にかけられて惨めに死んでいくイエス。そんな姿を見て、ペトロは言うのです。「あなたこそ私の神。あなたこそ私の本当の王。」ペトロは宣言しました。今日、同じ問いがわたしたちの前にあります。イエスの姿を見て私たちは一体何と答えるのでしょうか。私の生活の中で、私の人生の中で、私の心の中で、一体イエスとは何者なのでしょう。「誰かがこう言っている」という借り物の言葉ではなく、私の本当の言葉で私たちは答えなければならぬ。イエスは今日も言っています。「あなたにとって、わたしは何者なのか。」

(記録／広報部 イグナチオ・中村 遼)

今日は新庄教会でのミサがありませんので、新庄から信者の方がいらしています。私は今月、2週間ばかりフィリピンに行ってきました。私の会の会員の一人が、司祭になる叙階式があったからです。フィリピンの中のネグロスという島に行ってきました。飛行機の中もバスの中も、ミサの間もその後も、まったく言葉がわかりませんでした。ビザヤ語というのでしょうか。あとタガログ語。英語が少し聞こえてはきましたけれど、ほとんど理解できません。そういう世界にいますと、頭が真っ白になってきて、ストレスがたまります。2週間たって日本に帰って、成田の飛行場に着いて日本語が聞こえてくると、ほっとしました。「よかった」と思いました。

フィリピンから帰ってきて3日目に、東京で幼稚園の園長会議というものがありません。200人ぐらいの園長先生が集まり、大学の先生の講演などもありました。もちろん日本語でしたけども、だんだんと聞いているうちにフィリピンにいる感覚になってきたのです。何故かといいますと、その先生の話は「あの先生はこう言っていますよ」「あの偉い先生はこう言っていますよ」「また違う先生はこう言っていますよ」その繰り返しだったのです。

誰かがこう言っている、という内容を、1時間繰り返していたのです。それを聞いていると、退屈になってきました。フィリピンにいる時と同じように、言葉が頭に入ってこなくなったのです。思わず私は心の中で叫びました。「お前は一体、どう思っているのだ!!」そう叫びました。自分の思いをまったく語らなかったからです。それは外国の言葉と同じように聞こえてきます。退屈になってくるのです。

随分昔の事、私がまだ10代後半の頃の話です。ずっとつき合っている女の子がいました。それで、私の事をどう思っているのかなと思ったのですが、よくわからなかったのです。それで思い切って聞いてみたのです。「俺の事どう思っているの？」と聞きました。その女の子はちょっと下を向いて考えながら、こう言ったのです。「面白い人だって言う人もいるし、やさしい人だって言う人もいるし、いい人だって言う人もいるし…」という事を言ったのです。ガクッときました。私が聞きたかったのは、私について誰かがこう思っている、ということではなかったのです。あなたは私のことど



今年の4月復活徹夜祭で洗礼の秘跡を受けた市中博さんと主の降誕ミサで洗礼を受ける息子、市中洗太郎さん

洗礼を受けて

アブラハム 市中 博

初めて僕が山形教会に来たのは、息子が病気骨肉腫で病院に入院している時でした。呼ばれたように感じたので、フラッと静かな誰も人のいない御聖堂に入った記憶があります。天気の良い青空の日だったと思います。ミサの時間が日曜日九時半と書いてあったので何も分からずに通い始めたように思います。その時分はピアス神父様がいらした時で、息子のことを祈ってもらったり、聖書を貸してもらいました。

その後、一時教会から遠ざかり、息子が病院から無事退院した後、また通い出して洗礼を受けようと思い、本間神父にお願いしたのですが、撤回してまた遠ざかり、今年の春、息子が志望校に合格をしたので、主にお礼を言わなければと思い、また教会の御ミサに出た時、本間神父様が祝福の聖水を息子にかけて下さり、ついでに僕にもかけて下さり、その後なんだか解らないのですが、聖書を読んだりして洗礼を受けねばと思い、本間神父様に頼み直して勉強会をした後、その時も迷いや畏れもあったのですが、額に油を塗られた後、何かがふ�かれた感じがして、復活祭の時、洗礼を受けました。今は、とても感謝しています。

この間、ある小説を読んでいたら、フランス人の筋金入りの無神論者のことが書いてありました。その人の娘さんが自動車事故を起こして瀕死の重傷を負って入院している場面があり、そこで働いているシスターに「俺は自殺する」「俺は祈れないから、生きていてもしょうがない。何もしてやれないから」と言い、「どうして祈れないんですか。そんな簡単なことがあなたにはできないんですか」とシスターは言

い返したらしい。すると彼は「俺が祈ってもいいんだろうか」…、シスターが「どうしていけません?」と言ったら、しばらく黙ってから「楽になった。」とひとこと言ったらしい。

その娘さんは亡くなってしまうのだけれど、以前の彼は報復するタイプの人だったから、シスターはよくも神に頼めなんて嘘をついたなと責められるかと思って恐れたらしい。でも彼は違ってしまったらしい。『俺は娘の還った土地が分かる』と言い、シスターが逆に怖くなって『どこに還ったとお思いになるんですか?』と訊いたら『あなたの思っている所だ』と答えた。

彼の担う十字架は、喪失の苦しみ、悲しみ、痛みだけなのだろうか?

その時、誰か変な人がその人に尋ねたらしい。「あなたは どうして昔みたいにしないんですか」って、そしたら、その人が『耐えているほうが辛い』って。

この話を read した時、以前ほど親しい人との別離について恐れがなくなったように感じます。まあ、実際に子供が病気になるったりしたら、落ち込んだり、苦しんだり、取り乱したりするのは変わらないと思うけれど。人は、辛い生き方は選ばないし、無理に続ければ病気になるようにも感じます。

僕は、彼のように自制できる自信はまだないし、色々な誘惑に負けてしまうし、ゴメンナサイ!!

汚れた霊は戻ってくるといわれているので、空家で掃除されているだけでは…

主よ、僕は今、欲しい物があります。

クリスマス 心と体が軽くなる祈り

イグナチオ 中村 遼

暗い森の中を、たくさんの重い荷物を背負った女の子が一人、歩いていました。女の子はひどい病気にかかって自分の健康を失ったうえ、家族や親類からも見捨てられたのでした。人に言われた「神様はあなたを愛している」という言葉を頼りに、必至にここまで旅をしてきたのですが、途中で道に迷ってしまいました。いくつもの重い荷物が小さな肩に食い込み、女の子の肩は真っ赤になっていました。

女の子は疲れた様子で立ち止まると、ふう、とため息をつきました。もう三日も、何も口にできていません。財布は、何度開けてみてもからです。手足は冷たくなってきました。女の子は力尽きたように古い杉の木のそばに腰をおろすと、木に寄りかかって夜空を見上げました。女の子は心の中でつぶやきました。

「今日はクリスマス。神様が本当にいて、わたしを愛してくれているって、信じたい。もし本当に神様がいて、わたしを愛してくれているのなら、こんなかなしい自分にも、生きている価値があるんじゃないかって思える。それは、とてもとても、ほっとすることなの」

女の子の頭に、これまでのかなしいことや、現在の自分のみじめな姿が思い出されてきました。「お母さん、わたしによく言っていた。『わたしの機嫌をそこねないなら、お前のお母さんでいてあげるよ』って」

女の子の胸はかなしみでいっぱいになりました。「わたし、いつもお母さんをよろこばせようと必至だった。でも、病気でうまくできなくて、家を出されちゃった。『お前は気味の悪い、変な人間だよ。この世界のどこにもお前の居場所はない。お前は誰にも必要とされないよ』って。ねえ、お母さん。わたしって、そんなに気味悪い？ そんなに変？ わたしは……

誰にも必要とされないの？」

ついに女の子は、背負ってきた荷物のあまりの重さにたえきれなくなりました。「死ねば、いまよりは楽になれるかもしれない」と思い、寒さの中、目を閉じてしまおうとしました。そのとき、ふと「神様はあなたを愛している」という言葉が心に浮かんできました。その言葉は、女の子の胸を熱くさせました。女の子の中に「神様に話しかけたい」という強い思いがわいてきました。そう決心したとたん、女の子の胸は津波のような恐ろしさにおそわれました。「いるかないかわからない神様に話しかけるなんて、わたしは気が変になっているんじゃない……」

倒れてしまいそうになるのをぐっところえ、女の子は力の限り叫びました。

「神様！ あなたは本当にいる？ 本当にわたしを愛してくれている？ わたし、知りたいの。あなたを信じたいの……」

女の子の目から一粒の涙がこぼれ落ちました。涙のしず

くは周囲の空気を切り裂きながら地面に落ち、かさかさの枯葉を濡らしました。涙が地面に落ちた音は人間には小さな音でしたが、近くにいたアリや、鳥や、森の木々にはとても大きな音として響きました。

「小さなお嬢さん。何かお困りですか？」低くて落ち着いた、男の人の声が森に響きました。

涙が落ちた音を聞いて、古い杉の木が目覚めたのでした。

女の子は自分が寄りかかっていた杉の木がしゃべりだしたのを聞いて、非常にびっくりし、息が止まりそうになりました。「わた、わた……」

杉の木がやさしく言いました。「大丈夫。話してごらん」「わたし、神様とお話したいのです…… 神様が本当にいると信じたいのです」

女の子は緊張しながら続けました。「それで、それで…… 神様が本当にわたしを愛してくれているって、大切に思ってくれているって、信じたいのです」

女の子はこわくなって、目からまた涙がポロリと流れてきました。杉の木はそれを見ると身を屈めて、自分の枝で女の子の涙をぬぐってあげました。

「神様とお話するのは、とても簡単。大丈夫。一緒にやってみよう」

杉の木がやさしいので、女の子はほっとしました。

「神様がきみの前にあらわれて、きみを抱きしめてくれますように」

杉の木と女の子は一緒に祈り始めました。

…

…

…

数時間たち、祈りが終わったとき、女の子の目から涙がポロポロとこぼれ落ちました。

「うれしい、うれしい。神様はわたしを愛してくれている。イエス様はわたしを愛してくれている」

女の子の胸はうれしさであふれていました。

「わたし、気味悪くなかった。変じゃなかった。わたしの命も、体も、魂も、何もかも全部きれいなもの。きらきらしていて、宝石みたいなもの。神様、あなたがふれてくれたから、もうわたし、自分がかなくないの」

女の子は杉の木を支えにして、少しずつ立ち上がりました。「あなたはわたしを見てくれている。わたしが必要なものはあなたが心配してくれる。水も、食べ物も、空気も、服も、何もかもすべて、あなたが用意してくれる」

そのとき、女の子のよろこびに答えるように風が吹き、森の木々をざわざわとゆらしました。女の子の顔が真珠のように輝きました。

「そう。あなたが森の木々や、鳥や、虫たちにしてくれているように、きっとわたしにもしてくれる。わたしに何の力もお金もなくても、心配なくていいんだ。何も恐れなくていいんだ。あなたはわたしが必要なものを、何もかも全部くださる。これまでも、いまも、これから、ずっとずっと、あなたはわたしに心を配ってくださる」

女の子は自分の胸の上に手をおいて、服をぎゅっとつかみみました。

「わたし、何ももっていないけど、今、全部もっている気がする。あなたをもっているから、わたし、全部もっている気がするの。それがうれしい。とってとって、うれしいの」

様子を見守っていたアリや、鳥や、森の木々たちの胸にも、大きなうれしさがこみあげてきました。アリはうれしくなって、女の子が落とした涙のしずくに飛び込んで泳ぎだしました。鳥は自分のうれしい気持ちを歌にして森中に聞かせるため、夜空へ飛び立ちました。森の木々は女の子の涙を受けた枯葉の下に、小さな若木が芽吹いているのを見つけて、体を大きくゆらしてよろこびあいました。

「すてきな杉の木さん。どうもありがとう。杉の木さんがよいクリスマスを迎えられますように」

杉の木は女の子を、やさしく、深い、海のような瞳で見つめて、ゆっくりと歌いはじめました。

かなしくなったら いつでもおいで
うれしいときも ぜひおいで
ふつうのときも きてほしい
いつでもいつでも まっている
かわらずかわらず まっている

「やさしい歌! とってもうれしいわ。ありがとう」
女の子は杉の木の頬にキスをすると、森の出口へと歩きだ

しました。

「体がかかるいわ」女の子ははっとして、自分の肩に手をやりました。たくさんあった重い荷物を、杉の木の下に置いてきていたのです。女の子は、自分の体が軽くなったことをとてもうれしく思い、背負ってきた荷物を再び背負おうとは思いませんでした。かわりに女の子は自分の胸に手をおきました。すると自分の胸の中にあたたかな存在を感じ、全身にうれしさがこみあげてきました。女の子の目からは涙があふれ、口からはうれしさが歌となってあふれてきました。

こころがかかるいの まえよりも
からだがかかるいの まえよりも
こんなのはじめて うれしいの
ふしぎよ あなたはわたしより
わたしのちかくに いてくれる
あふれるのなみだ からだじゅうのうれしき
うれしい うれしい うれしいきもち
いっぱい いっぱい うれしいきもち
うれしい うれしい うれしいきもち

女の子はこのあと七十年元気に暮らしました。女の子にも時々かなしいことが起こりましたので、その時はかなしみを隠さず、正直に「かなしい かなしい かなしいきもち」とイエスに歌いました。するとイエスが「かなしいのですか」とやさしくなぐさめてくれましたので、不思議とかなしみは消えていきました。そんなわけで、「かなしい かなしい」歌はいつのまにか自然に「うれしい うれしい」歌に変わってゆくのでした。女の子はこのことをとてもうれしく思い、生涯イエスから離れませんでした。そして天国で大好きなイエスに会って、うれしさが声がつまるまで、女の子の歌が歌い終わることはありませんでした。

ある日の新聞より 被災地の外国人妻 母国語の祈り 支えに



岩手県大船渡市のカトリック大船渡教会、ミサ後のイベントでSr.野上を囲む

いつものように何気なく新聞をめくっていると、この記事が目が止まった。見覚えのある「顔」があったからだ。新庄教会の会報に大船渡教会からのお客様で載っていた人がそこに写っていた。

ダンサーとして来日したジーナは2006年に結婚し、夫の実家がある大船渡市へ嫁いだ。夫に「教会はどこ」と聞いて、行った先は結婚式場だったという。以来、教会通いはあきらめていた。

3.11.その時、とっさに口をついたのはタガログ語の祈りだった。「ディヨスコボ(神様助けてください)」。夫の車で高台に逃げた時に持っていたのは紙おむつ20枚の入ったバッグ。パスポートも国際運転免許証も持ち出せなかったが、腕の中で娘は笑っていた。家族の無事だけが救いだった。

震災後、外国人妻たちの絆は深まり、心の安らぎをもとめカトリック大船渡教会へ集まるようになっていた。インドネシア人のハルノコ―神父がタガログ語のミサを始め、聖心侍女修道会のシスター野上幸恵も多くの孤立した外国人のために被災地入りした。災害援助をするカリタス大船渡ベースを拠点に忙しい日々が始まり、職場を失った外国人女性たちも資格取得に動き出した。

震災で多くのものを失ったとき、この人達が心のよりどころとしたのが「教会」だった。私たちも同じだろうか、山形教会はどうだろうか。今日はクリスマス。悲しい気持ちでクリスマスを迎える人が、一人でも少なくなることを祈りたい。(広報部・小林雅人)